『成唯識宝生論』における唯識無境の論証

那　須　円　照

今回の発表では，『唯識二十論』に対する護法（Dharmapāla）の註釈書である『成唯識宝生論』の唯識無境（世界は心のみであり外界の対象は存在しない）という学説を積極的に論証した箇所について検討した（大正31.p.91参照）護法の唯識無境の論証に関しては，二つの内容がある。一つ目は，極微論批判的思考に基づく外界物質実在論批判であり，二つ目は，究極の唯識は仏陀の清浄な自己認識のみであり，他者の心の実在性も認めない，仏陀の絶対的包括的唯心論につながる思考である。まず，極微論批判的外界物質実在論批判の箇所を紹介する。アビダルマ論者によれば，色・声等には支分がなく，本体は一性であるとされる。それは，単一であるとされるヴァイシェーシカ学派によって主張される有分色のようなものとされる。しかし，唯識論者・護法によれば，色・声等の本体には妨げがあり，分割される可能性があり，多処を本性とし，アビダルマ論者の主張する色・声等の本体の単一性が否定される。唯識の立場では，それらの色・声等は識等（心・心所）から生じるが，その識等は精神的なものであるから，同一処であるというようには識等の場所は決定できない。よって，物質的に考えれば，極微論批判のように，色等は無限分割され単一なものとしても多数のものとしても実在性が保証されないし，精神的に考えれば，特定の空間的位置を占めるものとしては実在せず，識に還元されるのである。次に，仏陀の絶対的包括的唯心論につながる箇所を紹介する。ヴァイシェーシカ学派と仏陀との認識対象の比較がなされる。ヴァイシェーシカ学派は共相を認識するというが，これ（共相）は仏教徒にとって心・心所によって構想されたものであり，実在せず，

如来（仏陀）の認識対象ではない。如来は自心における清浄な不共法である勝徳を自己認識するのである。また，唯識（聖者が世間を出過してなした真実）を除いて一切法はことごとく非有であるとも説かれる。この箇所は『唯識二十論』梵文レヴィ本 p. 6. ll. 17-19に対応する。『唯識二十論』の対応箇所では，諸仏の対象は主・客と言語表現とを超えた諸法であるとされる。

（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）